

「征箭ノ身」で「靈」を退治した話

— 『今昔物語集』 27卷3話の意味するもの —

安東大隆

はじめに

『今昔物語集』の27卷3「桃蘭柱穴指出兇手招人語」は、次のようである。

今昔、桃蘭ト云ハ今ノ世尊寺也。本ハ寺ニモ无クテ有ケル時ニ、西ノ宮ノ左ノ大臣ナム住給ケル。其ノ時ニ寢殿ノ辰巳ノ母屋ノ柱ニ、木ノ節ノ穴開タリケリ。夜ニ成レバ、其ノ木ノ節ノ穴ヨリ小サキ兇ノ手ヲ指出テ、人ヲ招ク事ナム有ケル。大臣此レヲ聞給テ、糸奇異異ク、恠ビ驚テ、其ノ穴ノ上ニ経ヲ結付奉タリケレドモ尚招ケレバ、仏ヲ懸奉タリケレバ、招ク事尚不止ザリケリ。此ク様ニスレドモ敢テ不止ラズ、二夜三夜ヲ隔テ、夜中許ニ、人ノ皆寝ヌル程ニ必ズ招ク也ケリ。

而ル間、或ル人亦試ムト思テ、征箭ヲ一筋其ノ穴ニ指入タリケレバ、其ノ征箭ノ有ケル限ハ招ク事无カリケレバ、其ノ箭柄ヲバ抜テ、征箭ノ身ノ限ヲ、穴ニ深く打入レタリケレバ、其ヨリ後ハ招ク事絶ニケリ。

此レヲ思フニ、心不得ヌ事也。定メテ者ノ靈ナドノ為

ル事ニコソ有リケメ、其レニ、征箭ノ驗、当ニ仏経ニ増リ奉テ恐ムヤハ。

然レバ、其ノ時ノ人皆此レヲ聞テ恠シビ疑ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。

以上が、この説話の全文であるが、ここで注目されるのは物の霊が仏経よりも征箭を恐れた点である。そのことはたとえば岩波の古典文学大系の注にも、

者の霊が、仏経以上に征箭の力を恐れるはずがない。ただし、本集では靈異は仏教の力以外によって制圧される。

新大系脚注

とある。一般的な見解であろう。そのような疑問があることを念頭において、この説話を改めて考えてみたいと思う。

1

物怪は、普通加持祈祷など仏教の力によって調伏されるのが常である。ところが、ここでは、所謂加持祈祷などによらずに、武力によって解決されている。しかも、仏教による調

伏を試みたにもかかわらず効果がなくて、その後には筋柄によつたとある。そしてまたその当時の人も同じような疑問を持つた由の評言が付加されている。つまりこの話は『今昔物語集』（以下『今昔』と略称する）の編纂の当時より奇異に思われていたのである。それはある意味では当然のことである。多くの場合次のようなかたちになっている。巻12の28話を例にして述べてみよう。

この話は、肥後の国の書生が観音を念じて、羅刹の難を免れた話である。その説話の概略は次のようである。

書生が馬に乗って家より館の間、道に迷よってしまい日暮れ、広野に出てしまった。その時に「尾崎ノ有ル上ヨリ、吉ク造タル屋ノ妻」が僅かに見えた。喜んでその家に立ち寄って道を尋ねると、女が出てきて道を教えようとするが、その様子が「極テ怖シク」思ったので、馬を反して逃げていくと後から「長ハ一丈許ノ者ノ、目・口ヨリ火ヲ出シテ電光ノ如クシテ、大キニ口ヲ開テ手ヲ打チツヽ」追いかけて来たので、「観音助ケ給へ、我が今日ノ命救ヒ給へ」と、念じ奉りながら逃げる途中で、墓の穴に逃げ込む。鬼は馬を食べ終わって、次に穴の傍にやってきて、「此レ、今日ノ我が食ニ当レル者也。而ルヲ、何ゾ召シ取テ、不給ザル。如此ク非道ナル事ヲ常ニ至サセ給フ、我歎キ愁フ」と、穴に向って語りかける。穴の中から返事があって、「此レハ、我が今日ノ食ニ当レリ。然レバ、不可与ズ。——」と応答する。穴の中には鬼に勝つたものがあるに違いない。どちらにしても命はないものと思つ

ていると、鬼の退散した後に、穴の声は「我レハ此レ、鬼ニモ非ズ。此ノ穴ハ、昔シ、此ノ所ニ聖人有テ、此ノ峯ノ上ニ卒塔婆ヲ建テ、法花経ヲ籠メ奉レリキ。其ノ後、多ノ年ヲ積リテ、卒塔婆モ経モ皆、朽チ失セ給ヒニキ。只、最初ノ『妙』ノ一字許残り留テ在マス。其ノ『妙』ノ一字ト云フハ、如此ク云フ我レ也。我レ、此ノ所ニ有テ、此ノ鬼ノ為ニ被瞰ムト為ル人ヲ九百九十九人ヲ助ケタリ。今、汝ヲ加ヘテ千人ニ満ヌ。」と述べて、その理由を明らかにしている。「其ノ後、書生懇ニ心ヲ発シテ法花経ヲ受持・読誦シ奉リ、弥ヨ観音ヲ恭敬シ奉リケリ。」とあるのは当然の帰結ということが出来る。この説話は、『法花験記』に類話があるが、その方は、『法花経』の靈験譚であり、観音に関する話はない。羅刹の難を『法花経』の力によって免れた説話である。

何かの災難に遭遇した場合、仏や経によって解決される例が多いし、又当時の人もそういう風に理解していたのである。その事は先にも言及したように、

其ノ時ノ人皆此レヲ聞テ恠シビ疑ヒケルトナム語り伝ヘタルトヤ。

と、文末に付加されている編者の評言によつても、了解されよう。

羅刹の話のような形が一般的であるのに、懸仏は効果がなく征箭による調伏が、有効であると両者を比較しながら説明している。

「其ノ時ノ人皆此レヲ聞テ此ナム怪シビ疑ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ」と評言されているが、箭によって悪鬼を退散させる、もしくは退散させようとする話は、「怪シビ疑ヒケル」というような話なのであるうか。その点について先ず考えてみたい。

言うまでもないことであるが、箭は武具の一つである。つまり、仏経よりも武具の方が悪鬼を退散させるのに有効であると言うことを述べているのである。武具の方が優先されるという話は、『今昔』ではじめて語られているものかということ、そう断定も出来ない。それ以前にも、武具によっている例がある。

『源氏物語』の「夕顔」には次のような場面がある。某の院に夕顔を連れ出した源氏が物怪に襲われる箇所であるが、宵過ぐる程すこし寝入り給へるに、御枕上に、いとをかきしげなる女居て、「己がいとめでたしと見奉るをば、尋ね思はさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、御傍の人をかき起さむとすと見給ふ。物におそはるる心地して、おどろき給へれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きて、うち置き給ひて、右近を、起し給ふ。……略……また、上童一人、例の隨身も弦打して、絶えずこわづくれ、と仰せよ。人離れたる所に、心とけて寝ぬるものか。……略……このかう申すものは、瀧口なりければ、弓弦いとつきづきし

くうち鳴して、「火あやうし」といふいふ、あづかりが曹司の方に去るなり。

この物怪について源氏自身は後に「荒れたりし所に住みけむ物のわれに見入れけむ便に、かくなりぬる事」と述懐している。物怪に襲われて「うたて思され」たのであるから、念仏をしたり、『法花経』の一文を誦したりという物怪退治の方法も、当然考えられたであろうのに、刀を抜いたり、弦打をしたりしている。では、すべて武によるかというところでもない。『紫式部日記』の寛弘五年九月十一日の中宮彰子の敦成親王（後の後一条天皇）の御出産をめぐる記事を見ると、

（十日）日ひと日、いと心もとなげに、おきふし暮させ給ひつ。御物怪どもかりうつし、かぎりなくさわぎののしる。月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をばさるにいはず、山々寺々を尋ねて、験者といふかぎりは残るなくまもりありつどひ、三世の仏も、いかに聞き給ふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百万の神も耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ。御誦経の使立ちさわぎくらし、その夜もあけぬ。

験者や陰陽師を集めて、物怪を憑坐に移して調伏しようという試みをしきりにしている。更に又難産だったので、「御いただきの御髪おろし奉り」て、受戒をしたりした。これは出家の功德によって出来るだけ、御産が軽くなるようにと思つたからである。そして、その物怪は、一段と激しさを増して

くる。

今とせさせたまふほど、御物怪のねたみののしる声などのむくつけさよ。源の藏人には心誓阿闍梨、兵衛の藏人にはそうそといふ人、右近の藏人には法住寺の律師、宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたれば、物怪にひきたふされて、いといとほしければ、念覚阿闍梨を召し加へてぞののしる。阿闍梨の験のうすきにあらざ、御物怪のいみじうこはきなり。

「夜一夜ののしり明かして、声もかれにけり」という状態になる。物怪のすさまじさとその調伏に多くの力がさかかっている様が彷彿とされてくる。その結果平らかに出産があった。僧、陰陽師などが禄を賜っている。

この場面的ように体力が衰えたり、氣力がなかったりして、均衡を失い、不安定になっている時に、物怪は発動するものである。それに対してこの場面では弦打をするわけでもないし、刀を枕元に置くというようなこともしていない。

弦打の儀式が行なわれるのは、御湯殿の儀の時である。殿の君達ふたところ、源少将など、うちまきなどののしり、われ高う打ちならさむとあらそひさわぐ。へんち寺の僧都護身にさぶらひ給ふかしらにも目にもあたるべければ、扇をささげて、わかき人にわらはる。

文よむ博士、藏人の弁広業、勾欄のもとに立ちて、史記の一卷を読む。弦うち二十人、五位十人、六位十人、二なみに立ちわたれり。

弦打の者が二列に各十人並んでいる。

関連の記事が『権記』の寛弘五年九月に、

十一日戊辰 巳剋參左府、午剋中宮誕男皇子、仏法之靈験也、……………

十三日庚午、……………夕方御湯殿、致時朝臣読書、弦打二十人、五位十人、六位十人、……………

とあり、『紫式部日記』に記載されていることを、裏付けている。

類似の記事は、諸書に散見されるのであるが、たとえば『榮花物語』（第十一卷・つぼみはな）には、禎子内親王の誕生の様子が描写されている。

長和二年七月六日の夕方より、御けしきある様におはしませば、御祈の僧ども声をあはせての、しり加持参り、撒米し騒ぐ。内にも聞しめして、御使頻に参る。……………

月ごろいみじかりつる御祈の験にや、戌の時ばかりに、いと平かに御子生れ給ぬ。……………宮の御湯どの、儀式有様思ひ遣りきこゆべし。五位・六位御弦打に廿人召したり。五位は藏人五位を遣らせ給へり。

湯殿の時には、弦打が行なわれている。又、『宇津保物語』（国譲下）の描写も同様である。

大將殿（仲忠）は、宮の平かにおはしますべき事を神仏に申させ、所々に修法などせさせ給ふ。御産屋のありしよりも清らにして待ち給ふに、二月といふ、かみの十日過ぎぬ。人々心もとながり給ふに、仲の十日も過ぐれば、

よろづのかしこしといはる、僧都、僧正申しあつめて、
不断の御修法七八壇せさせ給ひ、真言院の律師して孔雀
經の御修法おこなはせなどして、おぼし騒ぐに、廿三日
の昼つ方より悩みはじめて、その夜ひと夜悩み給ふ。……
明る日一日なやみくらし給へど、……宮のうちよりは
じめて、左右の大殿、朱雀院よりも誦經の使のりつれて
ゆきちがひつゝ初瀬、壺坂までよろづの所々にまうで、
左右の大匠、御子達もみなおはしましぬ。……

難産の様子で読經、誦經等があちこちでおこなわれている。
そして、無事誕生の後の湯殿の儀は、

おとど、弓走り引きて、うち声づくり給ふ。大徳達近う
候へど、加持高うもせさせ給はず。「弱き人はそれにま
どひ給ふものぞ」とて、みそかによませ給ふ。真言院の
律師一人、逸早く読む。いと尊し。おとど「かゝる折に
は、人多くな候ひそ。騒がし」とて、御湯度々参りて、
弦打しつゝ、声づくりる給ひつるに、寅の時ばかりに、
いかいかとなく。

加持と同時に弦打が実施されている。湯殿の弦打について
は『侍中群要』(卷四)に、

御浴殿

口伝云、所司参上、了後奏事由、御浴之間、藏人一人候
而鳴弓弦、事了未御入之前、藏人問云、誰曾

とあることなどから、恒常的に行なわれていたことを知るこ
とが出来る。

これらの例を見ると、子供が生れる迄は、加持・祈祷・誦
經などの仏教的なものによることが多く、その後の湯殿の儀
には、弦打をしているようである。『中右記』(元永二年五月
廿八日)に中宮(璋子・鳥羽帝)の御出産がある。その次の
日、

廿九日 甲戌 未刻皇子御湯殿始

読書 大学頭敦光朝臣 藏人左少弁

左衛門権佐実光 大外記師遠

鳴弦 廿人

五位 十人 盛家、盛雅、雅職、宗国、盛季

泰兼、有成、為忠、朝隆、清泰

六位 十人 大炊助高基、木工助範章、有官一人、

光佐、光俊、季盛、光綱、清雅、

雑色六人、憲光、時信、文章生二人

これらの記述からも容易に理解出来るところである。

おわりに

いくつかの例を挙げてみたのであるが、物怪に対処する場
合の方法として、仏法によるものと、武によるものがある。
それらは、単独で実施されることもあったが、多くは同時に
あった。一方では加持・祈祷などをしながら、他方では弦打
をするというような形が一般的のようである。弦打は只矢を
番えない弦だけを引き鳴らすものであり、多分に呪術的な色
彩が濃いものである。しかし、言うまでもなく弦の音を聞いて

た物は、武による威嚇であることを知り、その出動を躊躇するのである。そういう武による威嚇の系統に『源氏物語』

(夕顔)のように刀をおくというような行動も考えられる。

(また、物の嫌がるものを提示するなどもその延長であろう。)

さて、この論で取り上げた、「征箭ノ身」の話も、そういう武による威嚇の範疇に納まるものと思う。すでに例で示したように弓の弦を引いて音をだすという威嚇の方法。それは、弓をもって待ち構えているという意志の表示であり、その次の行動としては、矢が放たれるという事態が想定される。したがって矢もまた威嚇の方法となりうる事は当然の帰結ではないであろうか。只この『今昔』の説話の場合は、仏を懸けるという調伏の方法が首尾よく成功しなかったというところに、興味をもつのである。しかし、先程のべたように同時に行なわれる場合が多いということを、念頭に於いて考えると、ここではそれが個別におこなわれているのであり、個別にその効験が示されているのであると言えるのではないであろうか。